



静脩

1989年3月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25, No. 4

図書検索とCD-ROM

大型計算機センター教授 星 野 聰

昨年の秋のことである。私は「狩猟」のことを知りたくなった。というのは、夏期に狩りをする一行のことを記した日本古代史の史料があって、私にはその記事が疑わしく思えたからである。ところが、私には狩猟の知識が全くないし、勿論ハンティングの経験もない。そこで、本屋に行ってみた。しかし、一般の書店にはペットの飼いの綺麗な本は並んでいても、動物を殺す技術を扱ったものは、昨今では容易に見当たらない。考えてみれば、今や大多数の日本人にとって、狩りは身近かなものでなくなってしまったのである。

そのうちに東京に行くことがあって、神田の古本屋で赤尾好夫著「狩猟・ハンターガイド」(昭和33年刊 ダヴィッド社)を見つけて入手した。旺文社社長と全日本狩猟倶楽部の会長で、かつハンターであった著者は、その中で「狩猟は秋から冬に限られている。これは鳥類の繁殖期たる春から夏をさげ、秋から冬の農林業への被害の少ない(原文:多い)時季を選定したものであろうが、実際問題としても、夏の狩猟などはナンセンスである。酷暑にあえぎ獲物は捕った後から後から腐敗してしまう。とても狩猟どころではない。」と述べられている。これは、ハンターとしての経験

による言葉で、単に文献を纏めたような書物から得られない実感をもっている。私は、夏の狩りをますます疑わしく思うようになり、もっと狩りのことを知りたと思った。

さて、国立国会図書館の蔵書の目録、つまり書誌情報がCD-ROM^(注)に格納されて、J-BISC^(注)と言う名前で、日本図書館協会から発売されている。ただ残念なことに、これには過去の10年分程度しか収められていない。このCD-ROMは、すでに各地の図書館などで利用されているが、我々のところでも、PC-9800シリーズのパソコンに、このJ-BISCをつけている。そこでまず、書名に「狩猟」か「狩り」を含んでいるものを探してみたところ、14件の書物が見つかった。

ところが、狩猟を扱っている本でも、題名には「狩猟」や「狩り」の語が入っていないことが多いのである。このことは、別に狩猟に限った現象ではない。

では、もっとある筈の狩猟関係の本をどうして探せばよいのか?

幸いなことに、国会図書館では一般件名と呼ばれるキーワード(国会図書館件名標目表にある)が書誌情報に付加されていて、これがJ-BISCに

も収められている。そこで、「狩猟」か「鷹狩」という件名をもっている書籍を探してみると、実に74件も見つかるのである。これらの書物は題名からだけでは調べることが大変であり、また困難なこともある。この中には、「放鷹」(宮内庁式部職編、吉川弘文館、昭和6年の復刊)や「御鷹場」(本間清利著)などが含まれている。鷹狩の語はこれらの書物の題名にないから、何らかの手掛かりがないと探すのが大変である。また、探索した中に「綱差役川井家文書」というものがあつたが、この綱差役は鷹場役人を指すものらしい。これを知っていないと、この文書が鷹狩と結びつかない。だから、上で困難なこともあると言つたのである。

このように、J-BISCを活用して、件名を使うと各書物が扱っている主題を手掛かりにして、能率よく書物を探ることができる。しかし、この件名は普通一つしかつけられていない。しかも書物の種類によって、例えば「狩猟免許試験例題集」のようなものには、件名が全くつけられていないこともある。これは科学技術文献情報のデータベースと違つている点である。

狩猟に就いてより完全に調べるには、図書分類を手掛かりにしなければならない。図書館や書店では、書物を主題順に書棚に配置していることが多いが、図書分類は、この配置に利用されている。ただし、狩猟関係の書物は、遊猟、鳥類、農林・水産などのいくつかの分類にまたがっているので、探す労力は大きくなる。(件名と分類との対応は国立国会図書館件名標目表にある。)

探索された書物の中で、学術的な感じがするのは大学図書館にもあることが多い。しかし、例えば大日本猟友会刊「近代日本狩猟図書館 全13巻」や堀内讃位著「日本伝統狩猟法：写真記録」、ひいてはハンター向けの雑誌、法規、統計関係などは、大学図書館にあまりないようである。

私は、J-BISCで検索した本のうちの若干を、国会図書館で閲覧したのであるが、「近代日本狩猟図書館」というのは、多くの古書の複製から成つていて、歴史の古い図書館では個々の書物を見出せるものもあろう。その内容は昔のハンター自身の著作など、とても興味深いものである。また、

堀内讃位著の本は、過去の貴重なハンティングの多数の写真を収めている。ハンター向けの雑誌とは「狩猟界」、法規は「動物六法」、統計は「鳥類関係統計」の類である。

内容としては、ホビーに属するものも多いが、それでも大学図書館になくてよいものであろうか？

と言うのは、自然と結びついた、活きた知識を得ることが出来るからである。特に、人文科学の研究では、このような知識が必要だと思つたからである。

関西には、広い分野に互つて書物を本格的に収集・整備している図書館が少ないから、これらを見るには、国会図書館で閲覧するのが能率的であろう。私の経験では、国会図書館で過去のほぼ10年以内に刊行された図書を調べるときは、ぜひJ-BISCで検索した結果、つまり書誌情報をプリントして行かれることをお勧めしたい。目録類を引く手間が省けるので、大変能率的である。そして、限られた開館時間を有効に利用して、書籍を調べられるからである。

なお、J-BISCは、なにも国会図書館を利用するときだけに役立つのでないことは、上に述べたことから理解されるであろう。例えば、大学図書館を利用する際にも、J-BISCを活用すれば便利な筈である。

ところが、調べてみたいテーマを扱っている本のリストがあるとき、一体どの本が良いのか、あるいは検索した以外に、もっと読むべき本が漏れていないかを知るのは難しい。これはもはや技術の問題ではない。書物を探すのはもちろん本人の責任であるが、その手助けの役は、本来ライブラリアンに期待されているのである。

〔編集部注〕

・CD-ROM : Compact Disc Read Only Memory

・J-BISC : Japan Biblio-diSC